



争いの種と人を愛すること



原爆ドームについての話から始まる説明文「平和の砦を築く」。そのお話を読みながら、この「ぼろぼろの原爆ドームと川向こうからそれを見つめる老人の写真」を見た子ども達は、「このおじいさんは、何を思って見つめているのだろう・・・」と話していました。その中で S 君は「きっとこのおじいさんは悲しさの中に在る。この建物がボロボロになった日に、何があったのか、このおじいさんは知っているから。でも、そこだけ止まっているんじゃなくて、その悲しさの先に『決意』がある。それは、この物言わぬ『証拠』を未来につないでいく決意なんだよ」と語っていました。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」、この日は、この世界ユネスコ憲章にある言葉から始まっていきました。S 君は、「争いの心はなくなる。」と言いました。私が、「争いの心を、その種をなくすことはできないの?」と聞くと、T さんも、R 君も、K 君も、「その種をなくすのは違う」という。T さんに至っては「そう言いたくない」という。私は分からなくて、「それってどういうこと?」と聴いていきました。すると、S 君がまた語り出した。

昨日、あのおじいさんの写真を見てから、ぼくは寝る前に1時間考えてたんだ。やっぱり悔しいだろうなって思うんだよ。だってさ、例えば先生が息子さんと知らない外国の人がいて、二人とも食べなきゃ死んじゃうってなっていた時、どっちを助ける? そう、息子さんでしょ。人間ってさ、やっぱり同じ命でも、全く同じには見られないんだよ。だから、目の前で大切な人が殺されたら、その殺した人を許せるわけないでしょ。僕は絶対許せない。だからその人たち(例えばアメリカ人)を許せなくて戦う。でも、その米国人を殺してしまったら、また恨みを持つ人が増える。そうやって負の連鎖が止められなくなる。これってさ、「アメリカ人」とか「日本人」とか、人間が勝手に決めた「境」みたいなことが原因でもあるでしょ。だから僕は、世界を一つの国みたいに見れないかなって考えてきたんだけど、それってやっぱり無理だったんだよ。近くにいる人の方が、大切になってしまうからって思っているんだ・・・。

S 君の言葉を聴きながら、私は、ハッとしました。それは、S 君が「争いの種は人を愛することにつながっている」と言っているんだと感じたからです。そのことを子ども達に伝えると、S 君も、T さんも「そうそう、そういうこと!」と言うのです。戦争の始まりは「欲」。ずっとそう思っていた私。でも、子ども達の言葉から「もし本当に『争いの種』になるような人への憎しみを抱えることがあるとすれば、それは愛する人を傷つけられる痛み、愛する人を守りたい思いなのかもしれないと思うのです。

「平和への問い」は尽きません。人類がずっと抱えている「平和への願い」。でも、なぜうまくいかないのか……。子ども達は、歴史で、政治で、国語で、そして日常生活で、さまざまにその教科を越えて貫かれた問いを生きています。「いじめ」、「人種差別」、「原爆」、「動物の殺処分」……。調べてはその事実から思ったこと、考えたことを綴っていく。そのことをくり返しながら、自分の考えを深めていきました。「学校のいじめ」について考えている Y さんは、先日このように綴っていました。

今日は、日本の学校の特徴を調べました。日本は児童や生徒を型にしっかりはめて、児童や生徒を学校(先生)のものにしようとする。そして、社会(学校の外の世界)とは違う特別な環境になってしまうということが分かりました。例えば、「メイクをしてはいけない」、「シャーペンを持ってきてはいけない」など……。それを破ったら、先生に「罰」を与えられる。そうすると、みんなが「ルール」を守ろうとする。でも、破った人はみんなと違って「かっこいい」という感情が生まれるんだと思います。破った人が「上」、型から外れた人が「上」、破らずに型にとどまっている人が「下」になって、そうすると、「いじめ」が生まれるんだと思います。

戦争の中に在る愛の物語

この日も社会科で「戦争」について語り合っていました。その中で S 君は再び国境(国の違い)で、なぜ殺し合いが始まるのか問いにしていきます。改めてその話を聴きながら、私は「戦争を学ぶというのは、〇〇年に何が起きたとか、何万人が死んだとか、そういうことではない。戦争中はお腹を空かした子どもに自分の食べ物を全部あげて空腹と栄養失調に苦しむお母さんがいたり、両親が死んでしまった後、盗みをしながらも妹に食べ物を届けようとする兄がいたり、大切な人を守るため自分の命を捨てて特攻隊に志願する若い兵隊がいたり。実は全部全部、愛の物語なんだって、そういうこと?」と子ども達に問いかけました。S 君は「そう。だから悲劇なんだ。だからくり返してはいけないんだ」と言うのです。私たちは、いかなる戦闘も、人間が命をかけて行動するのだから、そこには必ず「愛の物語」があるのではないかと考えるようになっていました。「人類の歴史は争いの歴史だ」と考えることもあります。しかし、どんな戦闘をしている兵士にも、それぞれの愛の物語があるのではないかと思えてきます。「戦時体制」の「贅沢はできない筈だ」の看板。配給が330グラムから300グラムに減った日のこと。女学生が兵器工場で働くこと。子どもたちの「優しい想像」は、戦争の悲惨さを、よりリアルなものへと変えていきました。



愛と正義、そして幸せ

学習を続けていたある日、中村哲さんの正義と幸せについて考えていた、A さんはこのような学習カードを書きました。

「幸せ」を求めて生きている今、私は幸せを探って迷路へと入っていった。私には幸せが分からなかった。でも幸せはみんなちがっていい、そう思えた。だから「みんなが平和になる」それが幸せとは思えない。だから、もっと幸せが分からなくなった。よく分からない。「平和」という答えも、「幸せ」という答えも、私には分からない。でも、人を愛することが、私にとって一番幸せ。大好きな友だちとケンカして、仲直りして、笑って、泣いて、それが私にとって一番だ。私の幸せはそれだ。正義…私には、「正義」が「幸せ」や「平和」につながるとは思わない。だから私は「正義」が嫌いです。これは「正義」を知らないかもしれない。よくわからない。

幸せを求め、愛を語る。自分の正義を押しつけることを嫌う。本当に、わたし自身も学ばせてもらえる人生の哲学がここにあると思うのです。この A さんの言葉に触れた子ども達は、さらに「正義」と「愛」、「幸せ」について語り合っていました。

- ・ぼくも「正義」には、嫌いな正義がある。アニメでね、海軍が背中に正義を掲げているんだけど、主人公のお兄さんをその主人公の目の前で殺すシーンがあるんだ。そこには、間違いなく「海軍の正義」があったんだけど、僕は見ていてとても好きにはなれなかったんだ…。
- ・そう、だからそれぞれの立場で正義があるから、「正義」は行き違うことがあるんだ…。だから幸せにつながらない。
- ・中村哲さんは、アフガニスタンの正義とアメリカ軍の正義の間に立っている人なのかな…。
- ・だとしたら、中村哲さんはアフガニスタンの人達と共に生きていながら、アメリカ軍の9・11のテロの切なさも一緒に背負っていたのかもしれない…。
- ・でも、米軍のその「やり方」は中村哲さんは許せないんだよ。米軍の悲しみも背負いながら、「でも、それは違う」という怒りが、哲さんの行動の原動力なのかもしれない。
- ・だとしたらさ、哲さんはずっと怖かったのかなあ。それぞれの正義の真ん中に立っていてさ、何が正しいかなんて分からなくなることもあるでしょ。ずっと、怖かったのかなあ。
- ・僕たちの憧れた中村哲さんはさ、強い人だよ。でも、その「強さ」って、怖いことも悲しいこともはねのけていくことじゃなくて、怖さも悲しみも、自分で背負って生きていくことだと思う…。
- ・正義は嫌いって言ったけど、中村哲さんの「正義」はなんだろう。それがもし、「人を愛すること」だとしたら…。人が幸せになるのって、誰かに愛されている実感だから、哲さんの正義は人を幸せにするものなのかもしれないね。

正義と愛、そして「幸せ」。私は一人の人間として、教師として、子どもの中で「正義」を語る先生ではなく、「愛」を語る先生で在りたい。子ども達と学びながら、今、そう思っています。